

原子力安全問題ゼミ：1991年3月27日（第39回）

「ピースボートによる世界一周環境調査」 荻野晃也（京大工）

ピースボートは1983年9月に第一回の船旅を始めた。当初は、太平洋諸国への船旅が中心であった。第1回のテーマが「1000海里・シーレーンを見つめ、反核をたたかう太平洋の島々と交流する船旅」、1984年の第2回が「過去の戦争を見つめ未来の平和を創る航海」、1985年の第3回が「実感！船旅＝アジア・日本・ベトナム戦争」だったことでもわかるように、日本の戦争責任を考えながら、各国の人々と「平和を求めて交流しよう」というのが中心テーマだった。その延長上の第10回記念航海として、ついに「クリーンでピースな地球をつくるガイアの船」とうたった「地球一周クルーズ」が計画されたのである。

日本でも戦前に「氷川丸」による「世界一周旅行」があったのだそうだが、戦後にはいまだその様な企画がなされておらず、「世界一周の船旅を楽しみたい」と思う人は、クイーン・エリザベス号などに乗るより他に方法がなかった。それだからこそ、戦後最初のこの「世界一周航海」を「自分たちの手で実現したい」とのピースボートの若者達の思いは強まるばかりだったのだ。ピースボートの中心人物の一人である辻本清美さんから、その計画を聞いたのは1990年の2月だったと思う。私は、地球一周するのなら、ぜひ「地球環境の調査もすれば良いのでは」と言ったのだった。そう言ったばかりに、いつの間にかこの計画の責任者にされ、「地球環境調査チーム」の団長格の水先案内人として、地球一周航海につきあうこととなってしまったのである。

世界一周に使用する船は、ギリシャの客船「オセアノス号（1万4千トン）」で、環境調査が出来るような船かどうかは全くわからない。事前調査としてエーゲ海クルーズ中のオセアノス号に乗船した上で、専用室の確保、電源の準備などの打ち合わせを行ったりもした。また堀場製作所を始めとする測定器メーカーと交渉して、簡易測定器を借用したり測定方法の勉強などをもして、あわただしく出発地点であるギリシャへ向かったのは90年10月の末だった。「戦後最初の地球一周航海」ということもあってか、定員550人の船は若者や定年組を中心としてほぼ満員状態であった。勿論、長い船旅に備えて、船内には色々なグループが誕生していたのだが、環境チームに協力する人々も多く、約3ヶ月の間、色々な調査を楽しく行うことが出来た。ギリシャのピレウス港を出航してからの寄港地は次の通りである。

ピレウス（ギリシャ：90.11.2） バレッタ（マルタ：90.11.4） チュニス（チュニジア：90.11.5） バルセロナ（スペイン：90.11.7） タンジール（モロッコ：90.11.9） ポンタデルガータ（ポルトガル：90.11.12） フリーポート（バハマ：90.11.20） ハバナ（キューバ：90.11.21） パナマ運河（パナマ：90.11.25） コリント（ニカラグア：90.1.27） アカプルコ（メキシコ：90.12.4） ホノルル（米国：90.2.10） 広島（日本：90.12.23） 長崎（日本：90.12.24） 上海（中国：90.12.26） マニラ（フィリピン90.12.30） ホーチミン（ベトナム：91.1.2） シンガポール（シンガポール：91.1.6） コロンボ（スリランカ：91.1.9） ボンベイ（インド：91.1.14） アデン（イ

エーメン：91.1.19) スエズ運河(エジプト：91.1.23) リマソール
(キプロス：91.1.24) ピレウス(ギリシャ：91.1.27)

であった。

これらの環境調査報告は、1992年のブラジル・地球環境サミットに間に合わせるために出版された473ページもの「地球はまだ青いだろうか？ピースボートの地球の健康診断 一周航海」(第三書館)に詳しい。その本から、ピースボート「地球の健康診断」報告書の調査項目を以下に紹介しよう。

- (1) 航路の位置・気温・水温の調査
- (2) 酸性雨の調査
- (3) 雨水の重金属調査
- (4) 雨水の水質調査
- (5) 飲料水の大腸菌調査
- (6) 飲料水の硬度調査
- (7) 飲料水の重金属調査
- (8) 飲料水の水質調査
- (9) 河川水の重金属調査
- (10) 河川水の汚染調査
- (11) 河川水の水質調査
- (12) 工業廃水の水質・重金属調査
- (13) 航路(河川・運河・海洋)の塩分調査
- (14) 航路(おもに海水)の汚染調査
- (15) 航路(おもに海水)における重金属調査
- (16) 寄港地での水の透明度調査
- (17) 放射能汚染調査(土壌)
- (18) 放射能汚染調査(食品)
- (19) 大気汚染調査(フロンガスなど)
- (20) 大気汚染調査(CH₄、CO など)
- (21) 残留農薬の調査(土壌)
- (22) 残留農薬の調査(小麦粉・粉ミルク・紅茶)
- (23) ベトナムの土壌のダイオキシン残留調査
- (24) ニカラグアの綿畑における農薬調査
- (25) 海に流れるゴミの調査
- (26) 巻き貝の奇形調査
- (27) クルーズ参加者の意識調査

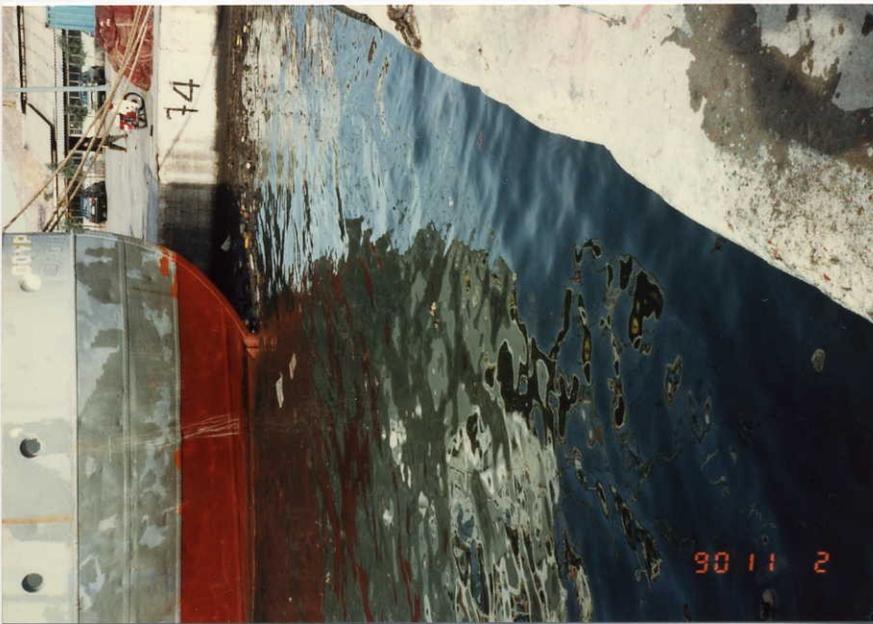
である。勿論、素人集団が集まって思いつくままの調査をし、下船後も有志が測定などの協力を行い、このような報告書を作成したことは、高く評価されるべきだろう。また「環境チーム」は3ヶ月の航海中も船内で多様な活躍をしていた。例えば、「船上環境フォーラム」として沢山の方々にご講演をして頂いた。その方々の名前を紹介すると、

「綿貫礼子」「ガブリエル・クライナー」「荻野晃也」「ウベ・フォルクナー他」「樋口篤三」「オクタビア・バロッシ」「アリシア・アベジャネーダ」「パトリシア・ガルバーナ」「モンチ・フィフィタ」「アマンラ・レイ」「グエン・フォン」「フォン・ナン」「川口由一」「宇井純」「小杉泰」「坂下栄」「森住明弘」「木村晋介」「伊丹久子」「粉川良平」「金城朝夫」「石川文洋」「青木敬介」「橋本勝」「鎌田慧」「小峰光男」「吉岡達也」「寺井一通」「小川裕」

の方々であった。それらの方々のお話の内容も、本の中に簡単ではあるが紹介されている。

この「地球の健康診断」報告を含む「地球はまだ青いだろうか？」の本は、1992年6月に完成し、直ちにブラジルで開催された「地球環境サミット」会場に運ばれて、世界中の環境グループに配布された。日本の一市民団体が、このような「地球の健康診断」を独自に行った事への関心はとても高かったのだそうだ。それを聞いて私もホッとしたことを覚えている。

原子力安全問題ゼミで私がこの調査報告をしたのは、1991年3月のことであるから、この本にまとめられているような調査報告がまだ出そろっておらず、一部の報告しか出来なかったはずである。14年後の今となつては、どんな事を話したのか全く覚えていない。多分、健康診断調査の苦労話やチェルノブイリ原発事故の話などを含めて、地球一周の写真を中心にお話ししたように思う。そこで、それらの写真を幾つかお見せして、この「遅れたレジュメ」にすることでお許し願いたい。(2005年5月8日)



【写真・1】(写真は横です)
「ピレウス港の真黒な海」
東京湾より、汚れているのではないか。ギリシャでも問題になっているとか。アテネ市内の大気汚染もすごかった。2000年オリンピック誘致に失敗した原因の一つにあげられていた。



【写真・2】
「チュニスの工場の煙」
火力発電所の煙なのだが、40年ほど前の日本と同じか？先進国の援助で建設されており、フィルターは設置されているのだが、費用がかさむので「はずしている」との説明だった。



【写真・3】
「バルセロナのゴミ箱」
ゴミ箱の横に立つ私。世界中国々には色々なゴミ箱があつて面白かった。ゴミ箱ばかりを写真に撮っておられたのが、水先案内人として乗船されていた伊藤ルイさん(故人)だった。



【写真・4】(写真は横です)

「ハバナ港の海」

世界一汚れていると思ったのがこの港だった。車の排気ガスもすごかった。米国の経済封鎖の為もあって、質の悪いガソリンや重油しか入手できないのだとか。それでも、キューバの人々の顔は生き生きしていた。



【写真・5】

「チェルノブイリの子供達」

キューバは医療技術が進んでいることと、汚染していない食品があることもあって、多数の子供達をチェルノブイリ原発周辺から引き受けていた。私たちも子供達を激励するためにおみやげを持参して訪れた。



【写真・6】

「パナマ運河の光景」

ジャングルの真中を巨大な一本の水路が走っている。兩岸にかいま見えた動物たちにとって、この水路は環境破壊の最たる物でしかないことだろうと思いながら通ったことだった。



【写真・7】

「アカプルコの海」

リゾート地として有名なアカプルコの海は汚れていた。この写真は海に注ぐ川の汚染状況である。金持ちの観光客を目当てにして、多くの人々が集まり、その人たちの生活排水が海を汚染し、観光客が逃げ始めている。また、どこかで同じ事が起きることだろう。



【写真・8】

「サイゴン川の兩岸」

ホーチミン市を目指して、サイゴン川を進む。兩岸は、見渡す限りの低い森が続いていた。いずれも、10年程度の同じ若木ばかり。枯葉剤に強いアカシアなのだろう。森林の多い日本が「うらやましい」と何度いわれたことか。植樹に参加することが若者に義務づけられているようだ。



【写真・9】

「ツーズ病院の資料室」

ツーズ病院では、ベトちゃんドクちゃんの見舞いに行った。病院内の資料室には、このようなホルマリン漬けの胎児が沢山並べられていた。皆、無言だった。



【写真・10】

「環境フォーラムの風景」

東欧圏から参加された水先案内人の方にチェルノブイリ原発事故の話をして頂いた。91年1月17日のことで、船はアラビア半島にさしかかっていた。丁度その時に、船が大きく揺れたのだった。米国の原子力空母が進路を遮っていた。



【写真・11】

「巨大な原子力空母の姿」

進路を遮った米軍の原子力空母からは、次々と戦闘機が飛び出していた。湾岸戦争が始まったのだ。2 kmほど離れた距離だそうだが望遠鏡で見ると、甲板を走る兵士の姿まで見ることが出来た。複雑な思いだった。



【写真・12】(写真は横)

「キプロスの分断境界線」

左上に見えるのがトルコ軍の哨兵基地。中央がギリシャ側の教会のマリア像。ニコシアの町の中には、このような境界線が残ったままだ。朝鮮半島、中国・台湾、そして、このキプロス。